

# 遠賀川 直方の水辺の景観デザインと空間利用の変遷 に関する研究

竹林, 知樹

<https://hdl.handle.net/2324/7157341>

---

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (工学), 課程博士  
バージョン :  
権利関係 :

氏 名 : 竹林 知樹

論 文 名 : 遠賀川 直方の水辺の景観デザインと空間利用の変遷に関する研究

区 分 : 甲

## 論 文 内 容 の 要 旨

日本では1960年代から急激な都市化が進行し、特に都市域の河川では「治水」・「利水」が極端に優先されたため、河川空間は治水や利水機能のみに利用され、自然生態系や人間にとって快適な「環境」が非常に限定的に残されることとなった。しかしながら1997年に河川法が改正され、河川管理に「環境」と「市民参加」が加えられたことにより、河川空間を都市のパブリックスペースとして認識する市民が主体的に河川整備に参画しはじめ、「治水」・「利水」と「環境」を両立する実践的な河川整備手法が模索されている。

これまで日本の土木分野において河川空間も含めパブリックスペースのデザイン意図がどの程度達成されたかについての検証や分析は乏しい。社会基盤事業への投資が今後選別されていく中で、事業のデザイン意図と利用実態の把握、検証は重要になってくると考えられ、知見を蓄積する必要がある。また社会基盤事業はその特性上、一度整備されると長期間維持されるものであるため、長きに渡り整備効果を発揮する空間づくりが求められる。このような空間デザインに関する知見を得るためには、長期に渡り継続的な空間デザインの評価と検証が重要だと考えられる。

本研究では、長期間継続して整備効果を発揮する空間デザインに関する知見を得ることを目的に、遠賀川直方地区をケーススタディとして、改修した河川空間の利用実態の変化を12年間にわたり精査することにより、デザイン時に意図していた整備効果が十分に現れているかを検証し、空間の利用実態とデザイン意図との関係性を明らかにする。

本論文は以下に記述する4つの章で構成される。

第1章は序論として、本研究の背景および河川整備事業の事後評価に関する既往研究や意識・利用行動の経年変化に関する既往研究を整理した。また、本研究の目的および方法を述べた。さらに、本論文の構成を示した。

第2章は、空間の利用実態とデザイン意図との関係性を明らかにするため、遠賀川直方地区の河川改修における主たるデザイン意図を整理した。デザイン意図にもとづき第1期から第3期にわたる河川改修事業の改修項目について整理した。

第3章は、空間の利用実態を把握するため、2006年、2009年、2018年の行動観察調査により整理した。調査対象は遠賀川直方地区とし、上流側は勘六橋から下流側は左岸駐車場までの兩岸延長約600m区間とした。調査期間は2006年、2009年および2018年における10月～11月とし、よく晴れた平日と休日各1日を選んで実施した。調査時間は7:00～17:00である。調査は毎回15名程度の調査員によって行なったが、各年とも現地で予備調査を行い、各調査員間でばらつきがないよう調査手順・ヒアリングの行い方・記録の方法等について確認した。調査結果として、総来場件数では、改修直後の2006年から2009年にかけて平日は約1.3～2倍、休日は約1.2～1.3倍程度増加し

た。2009年から2018年にかけて休日はさらに約1.7倍に増加しており、改修から年月を経ても来場者数が増加傾向にある結果が得られた。来場者の年代は、年を経るにつれ10～40代の合計の割合が増加傾向にあり、様々な年代が場所を利用するようになっていた。来場者の人数構成は、年を経るにつれ、「個人」以外の「親子」や「カップル」といった2人以上の人数構成の割合が増加傾向にあり、多様化が確認された。来場目的は、年を経るにつれ「散歩」と「犬の散歩」以外の「遊び」や「魚釣り・虫取り」といった割合が増加傾向にあり、多様な利用が見られた。特に「遊び」の割合が増加傾向にあった。来場者の居住地については、平日の市内居住者の割合は変わらず、利用が定着した。休日の市外居住者の割合が増加した。以上より、年を経るごとに、総来場者数は増加傾向にあり、年代、人数構成、来場目的、居住地については多様化傾向が確認された。

第4章では、空間の利用実態とデザイン意図との関係性を明らかにするため、改修前、2006年、2009年、2018年の平日・休日の歩行ルートに関する調査結果と、観察された空間の利用実態を示した。そして各年の空間利用実態と主たるデザイン意図との関係性を把握した。年を経るにつれデザイン意図が空間利用に重層的に影響を及ぼし、デザイン意図の達成がより深まる傾向が確認された。空間利用の変化に影響を与える要因として、遊具の設置や来場者層の多様化等による遠賀川の風景と空間に誘発されて生まれた新たな利用、中州の形成等の河川の自然の営みによる変化、水際プロムナード等の河川改修による空間自体の変化、散策路の舗装化や草刈り等の河川管理の4点が認められた。

第5章では、本研究で得られた成果を総括して本論文の結論とした。

終わりに、今後の展望について述べた。